
Camouflaged Longevity

壇 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C a m o u f l a g e d L o n g e v i t y

【Nコード】

N 0 7 9 2 N

【作者名】

壇 敬

【あらすじ】

ようやく開発に至った老化するサイボーグは長年の懸案であった。その試作を志願した男は、残念ながら実験終了の2ヶ月前に自殺した。

検証した彼の身体は完璧な老化を示していたが、自殺に至るその理由だけは…。

（前書き）

少々趣きの違うバイオ・SFを描いてみました。
本腰を入れる前のウォーミングアップです。

「素晴らしい。この水晶体の曇り方は」

眼球から取り出した水晶体をライトの光にかざしながら、男は嬉々としてつぶやいた。

「この血管なんかは芸術的だぞ。コレステロールの塊が血管壁にビツシリだ」

腹部を切開した男は、腹部の大動脈を取り出して、歓喜の声を上げた。

その様子を手術見学台のガラスの向こうで見ていた、黒いシャツを着た初老の男はフツと笑った。

「当然だよ。我々は完璧だ。老化のスピードさえも計算通りだったよ。ただ、二ヶ月の誤差はあったがね」

その後ろにいた、目尻に皺のある女性が、大粒の涙をこぼしながら、手術の様子を静観していた。

そんな彼女を見ながら、黒いシャツの男は言った。

「何を泣いている。まさか、彼に感情移入したのか？」

黒いシャツの男は、彼女を振り返った。

彼女は、何も言わずにハンカチを握り締めて、手術台で解剖されている『彼』をじっと見つめていた。

「『彼』は、ただのロボットだ。違うのは、彼のボディは金属じゃないってことだ」

彼女は、膝を着いてしゃがみ込んでしまった。

黒いシャツの男は、そんな彼女を無視して喋り続けた。

「生体サイボーグはずい分昔から量産製作され、販売されていた。だが、彼らの欠点は『老化しない』ことだったのだよ」

黒シャツの男は、部屋の隅にあるコーヒーマーカーから、紙コップに香りの抜けたコーヒートを注いで一口飲んだ。

「彼らは、家族の中で『取り残された存在』になった。子供や孫や

ひ孫が自分よりも歳を取っていくのだが、彼らは歳を取らない。だから、相続が問題になった」

黒シャツの男は、コーヒーを飲み干してから、ゆっくりと小さく呟いた。

「壊れればまだしも、壊れにくかったのも確かだ」

彼女は、ついに嗚咽し始めた。

そんな彼女を尻目に、黒シャツの男は雄弁に語り続けていた。

「だが、我々は遂に発見し、そして発明したのだ。そう、そうなのだ。老化の仕組みと寿命機構をだ」

黒シャツの男は、量の腕を高らかに振り上げた。

「何のことは無かったのだよ、老化なんていうモノの仕組みはね」

黒シャツの男は、急に含み笑いをした。

「簡単なことだ。擬似細胞の誤動作と崩壊の積み重ねだったのだ。それを細胞のライフスケジュールにプログラムしてやればいいだけのことだったのだ」

黒シャツの男は、勝ち誇ったように仁王立ちで宙を見据えていた。手術台の『彼』は、体のほとんどが解剖され標本化されて、ほとんど残っていないかった。

唯一、手術台の上に残されたモノは頭蓋骨内に納められていたハイブリット電子頭脳だった。

手術台を望むガラスの前に立った黒いシャツの男は、ポツンと置かれたハイブリット電子頭脳を見て、舌打ちした。

「ちつ。脳みそだけは古かったか。仕方が無いな。あの時代はあれが最高技術だったからな」

ハイブリット電子頭脳とは、シリコン素子とごく初期のバイオ素子で出来た、古いタイプのバイオピュータだった。

「シリコン素子は、百年前には盛んに使われた幼稚な計算素子だ。高ター二八ビットのシングル計算しか出来なかったからな」

悪態を付くように、黒シャツの男は言い捨てた。

「最新の量子バイオ素子は、乗数ビットのマルチ計算が可能だ。シ

リコンなんて金属は使われてもいないぞ」

黒シャツの男は、泣き伏している彼女を見て言った。

「あのハイブリット電子頭脳から、記憶データを抜き取るかい？」

黒シャツの男は、首を振った。

「たぶん、抜き取っても使い物にはならないだろう」

彼女は、もう一度ガラス越しに手術台を覗き込んだ。

そして、一言静かに言った。

「あなた……」

黒シャツの男は、それを聞き逃さなかった。

「惚れ込みしまったって訳か」

黒シャツの男はそう言い放つと両手を上に上げてから、部屋を出て行った。

「二十年はあまりにも長過ぎたわ。そして、あまりにも短過ぎたのよ」

彼女は『彼』の設計者だった。

そして『彼』は生体サイボーグの老化実験用のプロトタイプだった。

更に、老化実験の結果を急ぐあまりに彼の老化スピードは三倍に設定されていたのだった。

二十歳として制作され、二十年後の実験終了後には八十歳で機能停止するようにプログラムされていた。

だが、事件が起きた。

その事件とは『彼』は自殺したのだった。

プログラム完了まで二ヶ月を残して。

晩年の『彼』は、ハイブリット頭脳のせいなのか、老化プログラムのせいなのか分からないが、痴ほうの症状が出ていたのだった。

それを苦にしての自殺らしいのだが、真相はあのハイブリット電子頭脳が知るのみだ。

しかし、このハイブリット電子頭脳は、バイオ素子が極端に老化していて機能障害を起こしていた。バイオ素子のインターフェース

が壊れていたために、データを読み出すことも不可能だった。

バイオ臓器を制御するプログラムしかシリコン素子のメモリーバンクには存在していないため、性格はおろか、記憶さえ掴めない状態だった。

そんな中で『彼』の自殺は疑問だった。

その答えを知っているのは、彼女だけかもしれない。

「疲れたのよね、あなた」

「分かっているわ」

「もう、十分よ」

「安らかに眠って」

彼女はそう言うってから大声で泣き出した。

数年後、老化する生体サイボーグは販売中止となった。

原因は不明だが、自殺するサイボーグが多発したためだという。

彼女がそれを聞いてどう思ったか、そこまでは伝わってはいない。

（後書き）

感想などがありましたら、よろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0792n/>

Camouflaged Longevity

2010年10月8日10時58分発行